学校入学後、全く投書をやめて、学校の雑誌より詩の投書をして、全く中央詩壇を離れました。大学にきてから、『新人』より詩を載せてゐました。中央詩壇でも、泣菫、有明の詩が行きつまりになり、露風、白秋などがさわがれてゐましたが、私は全くこれらの新運動の圏外にいて、孤独の道をとるより外ありませんでした。大学をでても、たった一人でした。自分の作にも、非常な苦痛を味はました。しかし大正二年神戸に行ってから、詩興大いに動き、翌年まで引きつづき「六合雑誌」より詩を載せました。当時、成瀬関月が編輯で、加藤一夫君や、吉田絃二郎君や、野村隈畔君などがまだ毛色変りで活動してゐたので、非常に愉快な雑誌でした。私は初めもらった月給をためて、七十五円ほどの小版本をつくり、神戸で作ったものを集め『西雅より』と題して出しました。批評も、何もなくて、本は一部も売れませんでした。